

文 國 大 女 子

第百三十九号

平成十八年六月発行

八幡本地衣上影現説話展開の諸相

中前正志(一)

——『江記』新出逸文と嵯峨法輪寺縁起から——

『和論語』生成論

八木意知男(三元)

——吾、『本朝俗談正誤』を見つ——

〈怪しうひそむもの〉への眼差し

峯村至津子(五)

時の副詞「とうに」・「とづくに」の意味・用法

金英児(七)

彙報……………(八)

彙報

国文学会行事

○新入生オリエンテーション

四月五日(水) 午後三時〜 於B 501

○優秀論文発表会

五月十三日(土) 午前十時〜 於J 420

『土佐日記』の虚構性

岡村 一菜氏

樋口一葉「十三夜」論

八木恵梨子氏

―お関の生き方―

「銀河鉄道の夜」論

仲元 杏珠氏

―「ジヨバンニ」が得たものについて―

奈良県方言

曾原 梢氏

―アクセントからみる北部方言と南部方言―

○新入生歓迎行事「狂言鑑賞会」

六月十七日(土) 午後一時〜

会場 京都女子大学音楽棟二階演奏ホール

演者 茂山七五三先生 茂山千三郎先生

茂山正邦先生 茂山逸平先生

プログラム 解説・「千鳥」・「蝸牛」
○春季公開講座

六月二十九日(木) 午後二時四十五分〜 於J 420

講題 平安朝の漢詩文の世界

―『朝野群載』の作品を例として―

講師 大阪大学名誉教授 後藤 昭雄先生

研究室だより

○本年三月末日をもって、加納重文先生が定年退職されました。

今後ますますのご健勝とご活躍をお祈りいたします。加納先生からは、本号に、学生の皆さんへのお手紙をいただきました。

○昨年度一年間、京都大学にて内地研修されていた田上稔先生が、元気にもどってこられました。

○今年度一年間、峯村至津子先生が京都大学にて内地研修されました。鋭気を養われて、来年度にはもどってこられます。

○本年度の国文学科の主任は新聞一美先生で、和田俊昭・江富範子の両先生とともに、学科・国文学会の運営にあたられています。

○本年三月末日をもって、事務担当として長い間お世話いただいた林恭子さんが退職されました。今後ますますのご健勝とご活

躍をお祈りいたします。四月からは、あらたに江藤朋子さんが着任され、教員・学生のお世話を下さっています。

学生諸君への手紙

加納重文

こんにちは。今日は5月5日、多少クラシクな表現をすると端午の節句ですが、先月末からの連休が終わり近くなつてと、少し寂しく感じたりしている頃かと思えます。学生諸君、その後、どのように過ごしていましたか？私は、卒業生が催してくれた謝恩会で、これからは私の第三の人生、高校卒業あたりから再度始発するなど挨拶した通り、気持だけは勝手に若返つて、毎日楽しく過ごしています。

昨年度は、最終の年度でもあったので、学生諸君からも、いろいろ記憶に残る思い出を貰いました。四回生演習では、試問も終わつてからでは初めてというゼミ旅行をしました。愛知県の知多半島の海岸の塩っぱい温泉、近くの義朝終焉の地の見学、それにもまして、行く途中で寄った美濃・青墓の朝長墓。大学生の頃に読んだ『平治物語』で、父親に斬られて死んだ朝長の若い人生に心打たれるところがあつて、私としては唯一の能楽体験である、

「朝長」鑑賞。能楽堂では、ただ眠っていただけでしたが、一度訪ねたいと思つていた青墓を、教員生活の最後に学生諸君と一緒に訪ねるといふ、貴重で楽しい経験をしました。どうも、私一人で勝手に感動していただけだったみたいだけど。

三回生演習での学生諸君には、最後に、お礼の挨拶と花束と記念品を貰いました。突然のことだったので、「これは私の「商売」なので、特に感謝されるようなことは何も……」などと、なんだか不得要領な言葉を呟くような挨拶しか出来なかつたのが、いまだに心残りです。三回生演習は、開講ゼミを制限した関係で、ほとんどすべてのゼミが制限一杯の25名でしたが、私はゼミ分属の責任者だったので、後から追加で来た学生も、私が引き受けました。そのために、30名近くにもなり、ゼミ生諸君には、迷惑をかけました。数年前からの「ひたすら読み」形式の演習なので、それでも、四回くらいはまわりましたか。

四回生ゼミの内容は迷うことはありませんでしたが、三回生ゼミのやり方については、28年間の在職の間、迷い続けでした。私の学生時代は、旧制の名残で、本文校合・語釈・通釈というのがゼミ発表の内容でしたが、研究継承者の育成が目的という訳ではない現在の大学では、本文校合の作業は不要であるかと思ひ、最初に赴任した秋田大学でも、京都女子大学でも、その部分は省略

しました。けれど、それではどうするか。語釈中心でも、演習参加者が全員で議論するといった状態なら、大いに有効な時間になるけれど、そういう状態にはなれませんでしたね。男なら、厚顔無知に、議論風発ということもあるのだけど、女子大では無理のようでした。

それで、「ひたすら読み」方式で、どんどん回して担当して行くというスタイルを、最後の何年間かは取り入れました。これは、良かったと思います。この方式でも「参加していない」学生は、むしろ苦痛が増えたかも知れませんが、気持が参加している学生は、常に興味を持続していったのではないかと思います。それに、何度もまわっていると、学生個々の能力とか性格とかも、分かってくるし……。退職する前は何とも感じていなかったのですが、よく取り組んでくれた学生諸君が、その後、どうしているか、娘を見送った父親のような気分が、するものですね。

四回生の卒論ゼミでも古代を専攻する学生諸君とは、1時間だけ特別に時間を貰って、最後の挨拶をさせて貰いました。その時に、たとえばある作品を卒論の対象としようと思ったら、「研究・解説の類のものはまったく読む必要はありません。作品だけをしっかりと10回読みなさい」というようなことを言ったと思います。10回でなくて5回でも良いのだけど、水増しして言いま

た。それだけ読めば、その作品について、ホメルにしても、ケナスにしても、なにか言いたいという気持になります。要するに、その作品と友達になるんです。親しく仲の良い友達になるとは限りません。イヤな奴だ、不愉快な奴だと感じたなら、その悪口を書けばいいんです。ただし、他人が納得するような「理由」をちゃんとつけて。最近の学生諸君の卒論を見ると、この「友達」になる部分が稀薄になって、糊とハサミで工作しているだけという感じのものが多くなつたように感じます。学生諸君に久しぶりの挨拶のつもりで書き始めたのに、つい説教じみてしまいました。スママセン。

一回生の講読では、これも、京女で初めてという経験をしました。講読の時間のうちに往復できる、高倉天皇御陵・清閑寺あたりか、定子御陵・今熊野観音寺あたり、気候の良い時に「散歩」というのが、一年に一度くらいはあったのだけど、あいにく五時間目で、晩秋の紅葉の頃では、時間の始まる頃には暮れかかっていました。それでも、和泉式部が敦道親王に紅葉見物を誘われた場面あたりで、今度散歩してみようかと不用意に口走ってしまいました。学生諸君は忘れてしまっていると思っていたのに、「いつかな」と期待してくれていたのを知って、驚きながら、でも嬉しく思いました。けれど、帰りの六時頃にはすっかり暮れてとい

うのはどうかと思って、失礼してしまいました。その罪滅ぼしに、数名の学生諸君とは、比叡山から大原をまわって来るという、半日ドライブ旅行をしましたね。学問というものは、人間の幸福のためにあるものですし、その勉強をすることは楽しくて：ということではなければ意味がないと思います。比叡山の山頂から遠望した琵琶湖の風景など、少数の諸君としか付き合えなかったけど、私の人生に潤いを与える記憶になりました。

短大の講読では、一ケタの学生諸君と研究室で読むという、ありがたい作品講読の時間でした。実は、二年ほど前に、講読テキストの代金を紙袋に入れて回収した時、まとめて代金が合わないというショックな初めての経験をして、いささか感情を害した私は、その時の試験はわざと難かしくし、採点も一切救済措置を取らないで報告したら、三分の二ほどの学生が不合格になりました。学生諸君の間に、そのことが伝承されているのでしょうか、その後は、10人以下の学生しか受講してくれないので、思いがけない少人数教育が実現できました。怪我の功名というか、研究室で膝を突き合わせての時間は、気楽に楽しい時間でした。こんなことを書いてみると、なにか楽しんでいるばかりみたいですけどね。

楽しんでいると言えば、最初にも書いたけれど、今は、毎日が

この上なく楽しい時間です。自分という一個の人間にどんなことが出来るか、いわば人生に挑戦するという時間が、心おきなく取れるので、こんな嬉しいことはありません。自分の過去を振り返ってみても、10代から20代という青春の時代は、喜びも大きかったかもしれないけれど、苦しみや悲しみの感情も、鮮明に味わいました。青春まったただ中の学生諸君を羨ましいと思う気持ちもあるけれど、全能の神様に「同じ時間をもう一度繰り返しますか」と訊かれたら、どう答えるでしょうねえ。「少し考えさせてください」と言って、一週間ほど呻吟するのではないのでしょうか。

最近気付いたことがあります。大学の教員ではあったけれど、本当の学者でない私は、学問は飯のタネにしているのだという自覚がありました。自分の卑俗な学問に、引け目を感じたりしていましたし、それから脱出出来るという意味で、大学教員でなくなることには開放感を感じたりしていました。最近、作品とか論文とかを楽しんで読むということが出来るようになりました。そのことと自分が楽しいという心境は、これは案外私も捨てたものではないかもと、今頃になって感じています。またまた、妙な脱線になりました。書いていけばキリがありませんので、この辺で失礼します。

本音を言えば、青春まったただ中で、この世に生きている感動を

満喫できる学生諸君が羨ましいのです。人生のその時々にあふさわしいことは、後になって取り戻そうとしても、取り戻すことは出来ません。悔いのない若さを、今の瞬間にぶつけて生きてください。それが出来る学生諸君が、やはり羨ましい。「先生も、こんなこととして生きているのだな」と、諸君に知られることもあるように、私も、残りの時間を懸命に挑戦していきたいと思っっています。それでは、みなさん、お元気に。 (平成十八年五月五日)

二〇〇五年度博士(文学)学位論文題目

平安朝文学に見る触穢と服喪

檜垣(水谷)泰代

二〇〇五年度修士論文題目

江馬細香詩風の研究

竹中泉美

近世前期文学における武家像考

島岡洋美

—その変容をめぐって—

二〇〇五年度卒業論文題目

古代

采女の歌について

川人優希

扇の歌 —「八代集」を中心に—

北村英子

山部赤人歌四首 —「採む」を中心に—

本田桃子

『万葉集』相聞における「死」の表現

山村美和

笠女郎の比喩表現

横澤千恵

軍王の歌(五・六番歌)について

吉原啓子

—「羈旅歌と「風」—

『金葉和歌集』の成立について

平田麻希子

—大納言経信の和歌を中心に—

万葉集橘の歌について

西村美保

—大伴家持を中心に—

『源氏物語』の禁忌

寺島和奈

平安時代の夢

綾井陽子

娘への追憶 —『土佐日記』私論—

伊藤史織

『源氏物語』における雲居雁の役割

内田喜子

六条御息所の造型

岡本沙貴子

『蜻蛉日記』の研究

小西景子

光を象徴する神器

三本木佐代

—『古事記』に関する一考察—

堤中納言物語「このついで」と薫香

下田夕香

恋する男女

菅井俊江

『源氏物語』私論 — 六条御息所の「物の怪」 —

関 千裕

「はなだの女御」における草花の比喩

西谷 百代

天狗の造形の変遷

武田 絵理

— くわぎょう(大ぎょう)・くさのかう —

「逢坂越えぬ権中納言」の諸問題

富田 礼子

『土佐日記』における『伊勢物語』享受

矢野元 裕子

『源氏物語』浮舟について

仲村 美穂

『狭衣物語』飛鳥井の女君考

五十嵐 珠里

『源氏物語』の女性たちの容貌描写

野村 菜穂

『和泉式部日記』にみる帥宮死去の暗示

加野 智子

— 紫式部の美意識 —

中 世

『大鏡』の花山院について

濱 邊 ちひろ

『平家物語』における平清盛

青木 さゆり

「浮舟」巻における「わりなし」

三 木 麻 那

— 出家とその周辺 —

『伊勢物語』に見る女の幸福

濱 田 真理子

蛇退治の薬

青木 典子

虫めづる姫君の人物像

諫 本 麻衣子

— 『今昔物語集』第二十四卷第九について —

道綱母の心情 — 妻妾に対する対抗心 —

伊 藤 良 子

『小男の草子』と天神の力

井 上 恵 理

『落窪物語』でのあこぎの存在理由

今 井 静 香

御伽草子『あきみち』の妻の姿

衣 斐 夏 来

— 読者が求める主人公像から考える —

温羅伝説考

岡 本 智 美

「月」の考察 — 『竹取物語』成立時における —

上 田 友 紀

中将姫説話の展開

小 澤 幸 子

『土佐日記』の虚構性

岡 村 一 菜

御伽草子『梵天国』考

兼 松 育 代

『和泉式部日記』における敦道親王像

尾 堂 絵 美 子

『平家物語』における清盛像の形成

酒 井 幸 恵

『栄花物語』の歴史資料性

道 本 典 子

— 「武士」の視点から —

佐 藤 真 由 美

— 『大鏡』からの視覚 —

建礼門院徳子の「おごり」

佐 藤 真 由 美

『志度寺縁起』について

小 玉 真 由 美

— 『平家物語』における —

— 七つの縁起の成立順を考える —

『平家物語』における馬

清 徳 睦 弥

中世、付喪神が生まれた理由

小栗判官と中世の信仰

三輪神社縁起の一考察

—大物主神と海の関連性—

『鉢かづき』の鉢

—観音のご利益の在り方—

『平家物語』における「死」の表現について

『平家物語』にみられる小宰相の人物像

『天稚彦草子』と七夕

琵琶法師と『平家物語』

『北野天神縁起』怨霊考

—人から怨霊そして神へ—

『太平記』天正本作者の視点

—諸本間の呼称の相違を中心に—

近世

『西鶴置土産』論—無常観を中心に—

源内『根南志具佐』考

『おくのほそ道』小論—東北紀行の意義—

西鶴『五人女』における表現の特質

『本朝桜陰比事』論—西鶴の創作意識と雑話物の位置付け—

芹澤花佳

田阪加那

中室亜季子

野原美苗

原田舞

舛森砂和子

松岡里佳

森川優子

四方希友

清家 有樹子

青木美佐

大高侑子

岡本麻有子

小田 凡子

『男色大鑑』考—西鶴の思想とその背景—

秋成「目ひとつの神」論

—文化五年本と富岡本をめぐって—

西鶴理想の女性像

『諸艶大鑑』論—その評価をめぐって—

『日本永代蔵』における町人像

『雨月物語』考—「貧福論」から考える構成—

『西鶴名残の友』の一考察—西鶴像の探究—

喩としての人生—西鶴の世之介像—

『日本永代蔵』論

『世間胸算用』考—ユーモアの特色—

西鶴作品における矛盾—『男色大鑑』を考える—松木朋子

『桜姫全伝曙草紙』論—野分の方を中心に—

『浮世床』論—「通」と「野暮」と江戸庶民—

『日本永代蔵』論—モデル小説にみる商売—

『雨月物語』論—ヒロインたち—

『野ざらし紀行』論—芭蕉と旅—

『女殺油地獄』論

『五十年忌歌念仏』論—清十郎の罪について—

小幡里江子

片岡真衣子

黒沢育美

駒田千佳

左近実咲

鈴木千恵子

角 佳菜恵

塚原千明

辻本絵里奈

藤田知里

細川千栄

真渡千裕

安松美穂

山崎智子

山本久美子

竹島しのぶ

浅野まりえ

天春瑠実

『心中天の網島』小考 — 女同士の繋がり と 治兵衛 —

笠木明美

樋口一葉「やみ夜」論 — お蘭と波崎の現在 —

平野 惠理

『好色五人女』巻四「八百屋お七」の物語

上 鶴 志 保

樋口一葉「十三夜」論 — お蘭の生き方 —

八 木 恵 梨 子

『心中宵庚申』考 — 近松の描いた女性 —

小 浦 千 歳

二葉亭四迷「其面影」論 — 小夜子の存在 —

岡 西 由 香 子

『夕霧阿波鳴渡』小考 — 雪について —

小 堀 由 美 子

「にぎりえ」論 — お力の人物造形 —

國 富 瑠 美 子

『心中天の網島』における女房おさんの姿

田 中 さ ゆ り

泉鏡花「朱日記」論 — (葉萼) に込められた思い —

八 田 浩 実

— 大治兵衛に対する態度を中心に —

『心中天の網島』小考 — 女同士の義理 —

谷 野 晶 子

「山高帽子」論 — ドツペルゲンガーの気配 —

浅 井 亜 弥

「死ば同じ浪枕とや」小考 — 西鶴の工夫 —

中 村 至 寿

「それから」論 — 三千代と梅子にみる女性の生き方 —

天 堀 智 佳

『堀川波鼓』考 — お藤について —

檜 木 未 世 子

『刺青』論 — そこに見られる (変化) について —

磯 邊 幸 恵

『東海道四谷怪談』考 — 民谷伊右衛門の人物像 —

日 比 智 佳 子

犀星の求める女性像 — 初期小説三作品を中心に —

上 田 容 子

『心中天の網島』考 — 治兵衛と周囲の人々との関わり —

前 田 未 知 世

芥川龍之介「地獄変」論 — 語り手による一つのドラマ —

梅 園 充 子

日 比 智 佳 子

「蜘蛛の糸」論 — お釈迦様と健陀多の関係性 —

大 橋 架 与

前 田 未 知 世

「羊」と「羊男」 — 「羊をめぐる冒険」を中心に —

岡 崎 麻 衣 子

「この子」に込められた一葉のメッセージ

井 手 あ い み

三島由紀夫「潮騒」論 — ギリシャ的視点から見た新治の目覚め —

小 笠 原 芙 美

樋口一葉「暁月夜」論 — 香山一重の意志 —

遠 藤 香 菜

『にぎりえ』における一葉の思い — 朝之助と源七の存在 —

金 井 美 樹

「大つごもり」論 — お峯の描写について —

大 橋 聖 子

三島文学における (祖母) の投影

吉 瀬 奈 津 子

「わかれ道」論 — (年上の女) と (年下の男) の別れ —

佐 藤 明 日 香

「草枕」について

桐 山 紗 央 理

近 代

—芸術における西洋と東洋の引用の意味—

小泉八雲と焼津

久保田 真理

絵画的視点からの『檸檬』考

—静物としての檸檬—

古屋 久美子

芥川龍之介「河童」論

近藤 麻美

芥川龍之介「河童」について

本田 純子

—『ガリヴァー旅行記』・『エレホン』との比較から—

岸田国士初期戯曲の存在性

松崎 里美

山田かまち考 —「やさしい」若者の精神史—

後村 真世

—近代演劇にみる岸田の理論と「紙風船」—

「老嬢」に見る女性の生き方

榊原 倫子

「卍」論 —残された女性同性愛者—

松島 可奈

『魔女の宅急便』に少女の自立を見る

佐藤 奈月

宮部みゆき論 —『本所深川ふしぎ草子』を中心に—

芥川龍之介「秋」論 —信子の人物像について—

椎木 晶子

宮本 寛子

司馬遼太郎「龍馬がゆく」論

篠原 麻美

谷崎潤一郎「春琴抄」論 —春琴の美について— 森 沙織

—物語における女性の役割—

「こころ」に残された疑問

太田垣 晴望

「夢十夜」における〈待つ〉不安

柴田 麻貴

—〈私〉の最後の決断をめぐって—

漱石作品における〈眸〉の持つ力

豊田 智

「門」における宗助夫婦の距離

山本 啓美

—「夢十夜」第一夜を中心に—

「双子の星」「星めぐりの歌」論

小倉 理絵

立原えりか作品における「ゆめ」と「あこがれ」の問題

—フェルマータの効果—

仲元 杏珠

「銀河鉄道の夜」論

仲元 杏珠

谷崎潤一郎「痴人の愛」論

中川 典子

—「ジヨバンニ」が得たものについて—

谷崎潤一郎「刺青」論

渚 絢

南吉のカラクリ —「おぢいさんのランプ」— 林 智子

芥川龍之介「奉教人の死」論

野崎 千里

「柳橋物語」論 古江 奈保美

—炎と〈語り〉〈騙り〉—

随想の中の太宰治

村永 和香

「金閣寺」論—三島の美意識を中心に—

原 絵里子

漢文

『楚辞』が与えた菅原道真の詩への影響

五戸陽子

絵本のなかの関西方言

北脇真実

—「蘭」の表現を中心に—

女偏の漢字の印象について

國貞晴加

菅原道真と老荘思想

金嶺 碧

野口雨情「七つの子」の表現

後藤奈美

菅原道真の左遷における〈三友〉

金藤千尋

京都地方における言葉の移り変わりについて

斎藤千帆

菅原道真「寒早十首」について

窪田麻衣子

京ことばにおける婉曲表現と「いけず」

杉山宏美

菅原道真の菊 —白菊にみたもの—

武井 絵梨佳

徳島方言の文末詞

関 七瀬

日本神話における中国思想 —ヒルコについての考察—

小坂 まりえ

—「ダ」「ジョ」を中心に—

京都府丹後地方における方言の特色

関 若菜

奈良県方言

奈良県方言

曾原 梢

国語学

出雲方言のヤ行音文末助詞の研究

安達 恵

—アクセントからみる北部方言と南部方言—

人称代名詞としての「自分」

高宮 永

大正期以降の人名 —女性名を中心に—

内村 法子

方言における強調語について

谷合美香

万葉集にみられる順接仮定条件

大西 香奈

記号で表す意思・伝達の表現

田村 亜由美

日本の漢字における「女」の表現

岡田 恵

若年層の方言意識と方言使用状況

藤田 久美子

富山の方言における準体助詞「ガ」の使用状況

小川 奈津美

—「ハル」敬語を中心に—

七の不思議

湊 さや加

—高校生へのアンケート調査をもとに—

大阪府摂津方言における否定表現の世代差

奥 智子

語種による類義語間の選択について

南 早矢香

奈良県の待遇表現について

鍵谷 久美子

大阪府における「レル・ラレル」敬語について

成尾 彩子

熊本と大阪における文表現の違い

笠浦 望

大阪弁の文末表現ヤン・ヤンカについて

西口 浩世

現代における日本語人称代名詞用法の特徴

鴨下 諒子

否定を表す「くへん」から見る京ことばと大阪弁の違い

守屋 七菜子

山口市の待遇表現

— 尊敬語と挨拶表現 —

富金原 徳子

大分県の方言 — 可能表現を中心に —

秋田 景子

岡山県真庭市方言の独特な言い回しについて

森 脇 友美

沖縄の言語風景 — 島唄のメッセージ —

有馬 ももこ

隠語の研究 — 隠語の用語分析 —

社 真也子

愛媛県東予地方の方言

石井 盛子

若者コトバについて

吉田 友香里

— 「ジャ」のはたらきを調査して —

感謝表現として使用される以前のアリガタイの

愛媛県島嶼部大島の方言

後藤 渚

意味・用法について 安田 恵理子

「めづらし」についての考察

佐藤 恵美

「みすゞ母さん」の童謡

大塚 亜美

— 中世以前を中心に —

— 金子みすゞ 童謡に流れる命 —

鳥取県西部地方におけるラ行音節の発音について

発話行為動詞の意味構造

北条 佳代子

漢字・ひらがな・カタカナの使い分けとその効果

味覚を表現する形容詞の意味・用法

徳永 裕香

竹内 志津香

— 「うまい」「まずい」「おいしい」の分析 —

接頭語「もの」について

西井 祥子

— 「ものがなし」を中心に —

香川県観音寺市におけるアスペクト表現の実態

花房 裕子

「金沢ことば」について

濱 奈穂子

— 文末表現と語彙の視点から —

愛媛の気づかない方言

広畑 志織

— 方言意識との関係 —

優秀論文発表会に参加して

大國三津田明李

仏教の授業で学んだことによると、世の中には愛よりも恋よりも先に「縁」というものがあります。意として結果を生じさせる条件や事情であり、また関係を作るきっかけや巡り合わせにおいてもこの言葉は頻繁に使用されているようです。人も然り、物も然り。五月の肌寒い日に開かれたこの優秀論文発表会も、私にとつて大変「縁」のある出会いの日でした。

最初の発表者、岡村一菜さんの『土佐日記』の虚構性』は紀貫之の書いた『土佐日記』にどのような虚構性が加えられたのかを日程や気候・地名、そして架空の登場人物等当時の資料や習慣から指摘する内容で、それによると、『土佐日記』とは備忘録的な日記というよりも和歌を含んだ私的で創作的な「紀行形体物語」として捉えることができるということでした。それまで私は頭の中で『土佐日記』他古典作品が全て真実とは限らないものであると理解していたはずなのに、教科書にも用いられる「古典」という作品の枠に縛られていたのか、いざ虚構だと説明されると納得よりも先に意外だと思ってしまうました。普段文章を読んでいるよ

うで自分がいかに字面だけを追い、作品の奥に潜む意味に意識を向けていなかったのか考えさせられています。

また次の発表者、八木恵梨子さんの〈樋口一葉『十三夜』論―お関の生き方―〉では『十三夜』のヒロインお関の作中における行動や思想を詳しく分析し、同時代の小説や樋口一葉の他の作品に登場するヒロインと比較することで、お関が当時ありがちであった夫や子供にしがみついて生きていただけの女性ではなく自分の生き方に眼を向け自分の幸せに生きようとする新しいヒロインとして描かれていたのではないかという、現代の女性にとつても大変興味深い内容でした。

仲元杏珠さんの『銀河鉄道の夜』論―「ジョバンニ」が得たものについて―』という発表においては、作品の第一次稿から第四次稿を場面ごとに分類比較し、その中でも特に変化が大きかった「牛乳」と「ブルカニロ博士」と「父」を中心に『銀河鉄道の夜』という作品がどのように変わっていったか、そしてその変化によつて「ジョバンニ」が何を得心することとなったのかという内容で、今まで少なからず『銀河鉄道の夜』という作品を知っていると思つていた私にとつても驚きと発見の多いお話でした。作品というものは私たちの目に入るときすでに作者にとつて完成された状態に出されるので、こういう風に作者の構想が幾重にも変化し繰り返

された作品の過程を段階ごとに見られるのは作品における意味や作者の意図を知るのに参考になります。改変した部分を「ジョバンニ」が得たもの」だけに絞って見たことも、作者が何に重点を置いていたか、話の本筋をどのように変化したかがとてもわかりやすくなっていました。

最後、曾原梢さんの〈奈良県方言―アクセントからみる北部方言と南部方言―〉では奈良県の方言を南部の十津川方言と北部の市町村とで現地の方に協力してもらいながら発音の違いを調べて一覧にまとめ、方言が交通の便などによってどのように伝わっていったかを結論づける発表でした。方言という時代によって大きく違い、またその方言自体もすぐに移り変わってしまうもので調査が困難かつ一定でないと感じていましたが、現地まで行って丹念に調べた曾原さんの調査もきちんと整理されていて、かつ地方の交通や地形を取り入れた理論はわかりやすく、国語学の苦手な人にとっても面白く感じられました。

今回先輩方のお話を聞いたことに対してはもうですが、考えてみると卒業論文も私たちにとっては一種の出会いの場ではないだろうかと思います。古代から現代までの作品において取り上げる数も問題となる材料もそれぞれ星の数ほどありますが、その中で自分は何を主題にして研究するのか見極めることは論文を書く上

でまず一番にぶつかる問題といえるでしょう。例えば岡村さんのように、友人との何気ない会話の中で作品を疑うことから始めてみるなど出会いは本当に様々です。これからの私達自身がどんな作品と出会い、どんな問題とぶつかってそれらを解決に導いているのか。その結果は長い学生生活のけじめであり今まで学んだことの集大成ともいえます。三回生にもなると卒論を面倒だと感じる人達が増えてくると聞きますが、私はそう思いません。自分の学びたいことを学び、それをしっかりと形―卒業論文として残せたらどれほど嬉しいでしょうか。今回発表してくださった先輩を見習って、残りわずかな学生生活を無駄にせず自分の満足できる結果を作り上げていきたいと思っています。

最後となりましたが、お仕事がある中わざわざ発表のために来てくださった先輩方、貴重なお時間をありがとうございました。

京都女子大学に入学して

大国一田中美脈

表現基礎、文学研究、三年間の高校生活で私が興味を持った授業の科目名である。幼い頃から読書が好きで国語に関心の強かった私は、全国唯一の専門学科である国語科を有する高校に入学し

た。さまざまな文学に触れ、多くの表現を知る。それは私にとって大変貴重な時間であり、言語としての日本語の面白さや美しさ、そしてその奥深さを身体で感じられる三年間であった。

私が京都女子大学と出会ったのは、進路について考え始めてまだ間もない頃である。まず最初に感じたのは、先輩方の創り出す和やかな雰囲気の心地よさだった。京都の文化、土地柄、匂い。さまざまな地域の出身者が集まっているにも拘らず、そこには共通する聡明さと、伝統ある「女性らしさ」が感じられた。そしてそれは、大変魅力的なものであった。

私は本を読むことと同様に、文章を書くことが好きだ。ことばとは本来言語による表現であり、他者と意思を疎通するための大きな手段である。目には見えない感情や思考を形として残し、記録する作業。私が国語という科目に感じる面白さ、そして文学部国文学科を選んだ理由は、この作業にある。自分という一人の間が、誰に、何を伝えたいのかをよく吟味し、それを適切に表現する能力。私はこの力を伸ばす場所として、この京都女子大学を選んだ。そのきっかけは、高校卒業に当たって制作した記念作品集にある。

小説、詩、小論文など、テーマも形態も自由とされたこの作品集で、私は「私」をテーマとする文章を書き始めた。改めて自分

を見つめ直し、それをことばに置き換える。受験勉強と並行して原稿用紙に向かう中、そこに綴られることばの曖昧さに愕然とした。日本人のことを形容する際、「イエス」「ノー」がはっきりしないということがよく言われる。まさにそれに通ずるかのよう

に、私の書き出す文章はひどく抽象的なものであった。一番身近であるはずの「私」についてさえ、私は的確に表現出来なかったのだ。

先に京都女子大学を表現することばとして、「雰囲気」の心地よさや「魅力的」というものを用いた。私はそこに自分の力を最大限に伸ばす可能性を感じたのだが、それは余りにも漠然とした表現である。私はこの場所のどこに、どのような素晴らしさを見出したのか。四年間の学生生活を通して、今の私に上手く言い表せない沢山のことを、美しく、奥深い言葉で表現する術を身に付けたいと考えている。

自分を記録することは、変化や成長を感じられる一つの目安となる。この京都女子大学を卒業するとき、この文章を読み返す私は何を感じるだろうか。四年後、今の私が愛しい記憶となるよう、日々成長出来る大学生活を送りたいと思う。

京都女子大学に入学して

大國一 井上 真奈美

私がこの京都女子大学に入学して、二ヶ月が過ぎました。授業にも少しづつ慣れて、とても面白くなってきました。入りたいサークルも決まり、本格的に大学生活が始まったような気がします。

受験生だった頃は、ほんの数ヶ月先にあるはずの大学生活をなかなか現実的なものとして捉えられず、ただ漠然とした憧れを抱いているだけでした。それが、四月一日の入学式からは現実には手の届くものとなり、とても嬉しく思いました。

それでも最初は、校舎の場所が分からなかったり、高等学校まとは全く違う授業形態などに不安になったりしました。初めて自分自身で構成した時間割表を見たときも、科目数が多いのか少ないのかさえ分からず、心配になりました。

そのように迷ったり不安になったりしているうちに、五日間のオリエンテーションが終わり、四月七日、いよいよ授業が始まりました。最初の一週間は、講義の内容などの説明をして下さる先生が多かったです。また、様々な面白いお話をして下さいる先生も

何人かいらつしやり、その中で数人の先生方は、まるで口を揃えたかのように、全く同じことをおっしゃいました。

「せっかく京都の大学に来ているのだから、大きな行事があったり気持ちよく晴れている日は、学校の授業もそこそこにして外に出て、この京都という場所を存分に味わってみるのも良いでしょう。」

また、ある先生は、このようなこともおっしゃいました。

「この京都女子大学で国文学を学べるあなた方は、本当に恵まれています。そのことを、誇りに思ってください。」

まだ入学したばかりで、大学内のことにしか目を向けられていなかった私にとって、これらの言葉は少し意外でした。確かに自分が毎日通う大学となるとどうしても、それが普通のことである、と思いがちです。でも、京都国立博物館、三十三間堂や清水寺……。ここには全てを書ききることはできませんが、京都女子大学の周りには有名な場所が沢山あります。これからの国文学科での生活を、より良いものにできる環境が、ここにはあります。それは当然のことではなく、特別なことなんだ、と先生方は教えて下さいました。

また、学内にも私たちの大学生活の助けとなるものが多くあります。豊富な資料を自由に閲覧できる図書館も、その内の一つで

す。

それらの環境を最大限活用し、何事も中途半端に終わるのではなく、卒業するときにも、やっぱり京都女子大学に入学して良かった、と心から思えるような充実した四年間を送っていききたいです。

京都女子大学短期大学部に入学して

短国一 川井茉莉

私が短期大学部に入学して、最初に思ったことは、施設が充実しているということです。図書館は本当にたくさんの本が並んでいて、資料を探すのに最適で、勉強をするのにも快適で居心地がいいです。初めて見たときあまりの多さに感動しました。コンピュータの設備も整っていて、わからないことがあれば教えてください。とてもありがたいです。

そして、みなさん勉強熱心で、授業を受けているときの熱気がすごいなと思いました。授業は、これまでに体験したことのないものばかりで、貴重な経験をさせていただいています。日本文化の授業は、京都に来てよかったと実感しています。また、仏教の授業は、私にとっても新鮮で、なにか新しい目が啓かれたような

気がします。専門的な授業はまだまだ始まったばかりなのですが、さまざまな分野があつて奥が深いなと思います。もっとももっと勉強して追及していきたいと思っています。

授業だけでなく、サークルや委員会などに参加できるのもいいところだと思います。私が国文学会の委員会に入ったのは、学会の説明があつたときに、先輩方が司会をされていて、とてもかっこよく、私もこんなふうに学会のことに少しでも係われたらいいなという思いがあつたからです。まだまだ不慣れですがいろいろな仕事をやりたいなと思っています。

入学して、少ししか経っていませんが、自分は変わったなと思います。いいところが前よりも見えてくるようになり、そして、何ごとにも興味を持ちながら生活するようになったので、いきいきしてきたなと思います。これも友達のおかげです。いろいろな人と知り合うようになって、いろいろな考え方を知ることができ、自分では普段わからない自分の姿に気づかせてもらうこともあるからです。これからも前向きに、学園生活をどんどん充実させていきたいと思っています。

京都女子大学短期大学部に入学して

短国一 東 田 真 衣

今まで味わったことのない程の緊張感でした。高校生から一歩大人の世界に踏み込むという不安や期待が、四月一日、私の頭の中でごちゃごちゃに入り混じっていました。

壁紙の案内に従って行き着いた教室には、既に何人かの人自分と同じような面持ちで席に着いていました。私には知り合いが一人もいなかったのです、この緊張感を共に分かち合う友達が欲しくなりました。なぜなのか、話しかけようと思えば思う程、最初の一声がなかなか口から出て来てくれません。五分くらいたって、やっと前の席の人の肩をポンポンとたたくことが出来ました。一回顔を向け合えたら、もう思っていることが口からすらすら出てきます。一人ぼっちから二人になるととても心強くなり、後から教室に入って来た人達にも積極的に話しかけていきました。

大学は今までと違い、自分で受講する科目を決めます。どの科目を選ぶか、とりあえず「講義要項」の冊子を一から読んでいくしかありませんでした。上手いこと授業がかぶらないよう、一つ一つ確かめていくのは慣れない作業で、友達と二人夜までかかっ

て日程表を作りました。

それから、校舎を覚えるのにも苦労しました。京都女子大学の校舎は色々な所に点在しているので、移動の度手帳の地図が手放せませんでした。

今、入学してから二ヶ月程たちました。科目の選択・教室移動・電車通学など、初体験でとまどっていたのも少しずつ慣れ始め、それが当り前の生活へとなりつつあります。試験のことや単位のこと、就職のことだとか、まだまだ不安に思うことも多々ありますが、友達もできたし、授業のおもしろさも身にしみることができて、夢の楽しいキャンパスライフを送れているのではないかと思います。

本学の生徒として学校に通う間が、きっと私の最後の学生生活になると思います。なので、今あるこの一日一日を大切に、社会人になるまでに、少しずつでも知識や経験を積み重ねていきたいと思っています。

お知らせ

このたび、次のような『女子大國文』投稿規定を設け、第四百十号から適用していくこととなりました。この規定に則って、ふるって投稿下さいますようよろしくお願い致します。

『女子大國文』投稿規程

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿

であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたものでも可)。
- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたもの二部(審査用)と、投稿原稿が収められているフロッピーディスク一枚(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を明記すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。
- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・

ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはない。

六、(投稿先)

投稿先は以下の通り。

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修

正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、(掲載論文の電子媒体による公開)

掲載された論文等は、電子媒体によっても公開する。

十一、(規程の改正)

- ① 本規程の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規程の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

女子大國文

第三百二十九号

平成十八年六月十五日 印刷
平成十八年六月三十日 発行

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町三番地

編輯兼
発行者

京都女子大学国文学会

電話 〇七五・五三一九〇七六

FAX 〇七五・五三一九一二〇

振替 〇二〇八〇一五二三一四

〒602-8044 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所

西村印刷株式会社

電話 〇七五・四一四一〇八代

FAX 〇七五・四三三六二八二